

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0337
施設名	ゆりかご保育園
施設所在地	東京都昭島市松原町2-9-2
法人名	社会福祉法人ゆりかご会

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

土 (つち)

<テーマの設定理由>

子どもたちは、園庭や散歩先の公園などで、砂場遊びでの団子づくり、虫探しなどを行い、日頃から土に親しみを持っていた。そこで、土の感触や色、におい、水を加えた時の変化などをじっくり味わいながら、子ども自身が気づいたことや不思議に思ったことなどを深めていけるよう、「土」をテーマに設定した。

## 2. 活動スケジュール

- 9月 ・砂場遊び  
・砂場にて泥んこ遊び
- 10月 ・土には様々な種類があることを知る  
・様々な種類の土に触れる  
・水を加えるとどうなるのか

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・たらい ・じょうろ  
・土 (川砂、黒土、荒木田土、鹿沼土、赤玉土、ホワイトサンド)  
・しゃべる ・ばけつ ・ipad ・マイクロスコープ

## 4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・砂場遊び  
・砂場にて泥んこ遊び  
・土には様々な種類があることを知る  
・土をマイクロスコープで見る  
・様々な種類の土に触れる  
・水を加えるとどうなるのか

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・子どもたちは園庭や砂場で自由に土に触れ感触を楽しんだ。「山を作ろう」と山を作るものの、砂場の砂はサラサラしていて山にならなかった。「水がほしいね」と水を含ませると少し固まり、山を作ることができた。

・泥んこ遊びでは、自由に水を使い楽しんだ。カップに泥水を入れ「コーヒー屋さんです」とごっこ遊びを楽しんだり、水を含んだ砂の感触を楽しんだりしていた。汚れることが苦手な児も、他児の様子を見て、少しずつ「触ってみようかな」と挑戦する姿も見られた。

・泥んこ遊びをしたことで、栽培をしている土と砂場の土が違うことに気づいた。子どもたちと一緒にタブレットでいろんな土があることを知った。その後、顕微鏡で様々な土を観察した。すると、川砂をうつすと、「宝石みたい」「赤い色もあるよー」などと興奮して熱心に観察する姿が見られた。

・土（川砂、黒土、荒木田土、鹿沼土、赤玉土、ホワイトサンド）を用意した。色や形、匂いなど全く違うことに気づいた。鹿沼土をみると「なんか石みたい」、荒木田土をみると「うんこみたい」、黒土は「カブトムシの幼虫を育てる時につかったよね」などとそれぞれ感じた事を、子ども同士よく話していた。水を準備すると、それぞれの土の中に水を流し入れていた。ホワイトサンドは「水を入れても固まらないね」、鹿沼土や赤玉土は水と分離をし、なんの変化もなかった。保育者が荒木田土で団子を作っていると、数名が「私も作ろう」と泥だんごを作り始めた。荒木田土はよく固まり、それを見ていた他の児も泥だんごを作り始めた。鹿沼土や赤玉土、ホワイトサンドは子どもの力ではうまくまとまらなかったため、保育者が団子にした。その他はよく固まり、日陰で乾かした。

・後日、荒木田土が石みたいにかなり固くなっていることにみんな目を丸くして驚いていた。「落としても割れないかな」と初めは地面から20cm程から落としていた。それでも割れないとわかると、自分の身長の高さから落とした。地面がやわらかい素材だったこともあり、割れなかった。しかし、コンクリートの地面に落とすと割れた。地面の硬さで割れたことがわかった。その割れた破片で、一人の子が地面に絵を描き始めた。すると、チョークのように文字が書けたことを発見し、次々と子どもたち同士で盛り上がって喜んでいった。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・土遊びは「楽しい遊び」というだけではなく、子どもたちが自分で考え、試し、気づきを重ねて行く学びの活動であることを改めて感じた。

活動の中では、「水を入れると固まるよ」「水を入れすぎると崩れるよ」など、子どもたちなりに試行錯誤を繰り返す姿が見られた。大人が答えを伝える前に、自分で確かめようとする姿から、主体的に遊びへ向かう力が育っていることに気づいた。

また、普段は泥あそびに慎重だった子どもも、友だちが楽しそうに遊ぶ姿を見る事で少しずつ手を伸ばし、自分なりの関わり方を見つけていた。一人ひとりに遊びへの入り方や心地よい距離感があり、その子に合った関わりを大切にすることで、安心して挑戦できるのだと思った。

様々な土をみんなで調べ、用意すると、とても喜び「早く触ってみたい」とやる気に満ち溢れていた。マイクロスコープを用いて土を見てみると、川砂は宝石のように見え、とても驚き興奮していた。土を実際触ると、始めは触った感触や、匂いがどのように感じるのかなどの伝え合いだけであったが、水を加えると変わる性質に驚き、興味や関心が増していた。また、土が鉛筆のように文字や絵を書く道具になった事は職員一同驚いた。子どもたちだからこそその発見だったのではないかと感じた。

活動を通して、子どもたちは五感を使いながら、水を加えると変化していく様子や、乾かすと固まる不思議さなどを発見し楽しんでいた。保育者として結果を急ぐのではなく、子どもたちが「なんでだろう」「やってみたい」と感じる過程を大切にしていけるとともに、子どもたちの気づきに共感しさらなる探求心につなげることの大切さを改めて感じた。